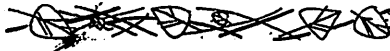


助産学会発足の頃から共に歩んで



松本 八重子 (前副理事長)

日本助産学会の創設以来、担当して来ました理事の役割を終えるに当たり、何か書くようにとのご要請に応えようと思います。

・学会結成の頃

当学会の結成は「全国助産婦教育協議会」の教務主任の方々が中心となり、「日本助産会婦会」「全国助産婦教育研究会」などと共同で「助産学研究の発展のために」という趣旨でした。当時私は看護婦教育に携わるようになっていましたが、「助産婦教育研究会」の会長でしたので、協議会の方からのお話を役員に語り、研究会はそのまま持続するが、学会の結成に参加し、会員にも入会についてお知らせすることとしました。

当時全国助産婦教育協議会会長であった松本清一先生は、自ら特別会員になって下さり、当学会を協議会の事務所に同居させて下さったので、家賃負担が軽減できました。初期の事務局は当時曙橋にあった母子衛生研究会に置かせて頂き、同研究会の理事長さんのご理解で事務の面でも大幅に援助して頂きました。発足時のよちよち歩きの学会のは大きな援軍でした。

・熱気の漲った第1回学術集会

設立総会と第1回学術集会は大阪で開催され、大勢の参加があり、お話ししている私のテーブルが、聴いて下さっている皆さんの圧で押され、3月というのに熱気が漲って皆汗だくでした。日本助産婦会のご高齢の方々も

大勢参加されました。ご存じのように昭和29年以来わが国の助産婦の職能団体は2つあり、それぞれに研究発表会などを開催していますが、この助産学会の第1回学術集会で「皆一緒に会合が持てた…」と感慨をのべられた先輩助産婦の方々の声と、ほっとしたような表情を、鮮明に思い出します。

・日本学術会議登録など

近藤理事長の先見性あるリーダーシップにより、登録の要件に合うよう整備し、日本学術会議に登録し、内容、組織共に学術団体としての成長の道を辿って来ました。私は学会誌の学術刊行物郵便を手続きしましたが、経費節減に有効でした。

・学術集会運営

第2回集会は青木会長でしたが、学術集会長が中心になっての運営は初めてでしたので、旧砂防会館の下見に同行して、「このあたりの席が埋まればよしとしましょう」などと、手探りの状況でしたが、大勢の参加があって、ほっとしたのも忘れられません。学術集会は前年から会場の予約金等多額の資金が必要ですが、学術集会からの残金を積み立てた中から資金を貸し出す仕組みもこの第2回の集会の成果から始まりました。

会員に学会を知って頂くよう、全国各地で開催してきましたが、初期の学会は隔年に東京で行いましたので、都内の会員の方々はその運営に何度も当たるなど縁の下の力持ちを

努めて下さいました。

翌年学会を開催する地域で会員の研究能力を養うためのワークショップを開いてきましたが、入会しないでの参加希望者があって担当の先生にはご苦勞をお掛けしました。

・学会誌編集

私は最初、学会誌の編集を担当しました。学術誌として背文字の入る厚さにするには80ページは必要で、査読後それだけの論文が残るよう期限までに集めることが第一関門なのですが、ある号では沢山集まって費用オーバーし、学会の身の丈に合った学会誌とする調節の困難を痛感しました。今は通常号が年2回となりました。

・ICM加盟と国際担当

総会での提案をきっかけにICMへの加盟が準備され、ICM側も当学会に加盟資格があるとのことで、1989年に加盟、以来私は国際担当として、ICMを含む国際的事項を担当しました。

その間、助産婦の定義の改定、所信声明、助産婦のための倫理規定、ICMの地球規模での活動戦略、定款・細則、助産婦に必須の能力といった重要事項が決定され、郵便による検討が行われ、相当量の翻訳を行い、ICMに本学会の意見の反映を図るとともに会員への周知につとめました。

海外の学生や若い助産婦から、資料がほしい、日本で就職したいとの相談も結構あり、日本語は全くゼロで、英語万能と思いついでいるふしがあり、学会の名称がこの種の問い合わせに繋がっているようです。

これも総会の提案でニュースレターが発刊され、国際関連のお知らせを掲載して頂きま

した。今は年に学会誌2回とニュースレター3回で、保存すべきものを前者にと配分しましたが、3年毎の国際大会のサイクルのICMからの記事の送付は学会の広報媒体の発行時期とタイミングが合わぬこともあり、ニュースレター発行直後にICMから新情報が届いたりもしました。

・論文の英文表題と英文抄録

学会誌に掲載の論文には英文表題を、原著論文には英文抄録が必要ですが、これは外国の研究者のためには必須であり、従って英語として理解できるものになっていなければなりません。折角の論文ですから、しっかりと英文とするために適任者に依頼するなどは、著者の責任です。私が米国ワシントン市近郊の医学図書館所属のナースを訪ねたとき、日本の看護系学術論文に通曉しておられ、高く評価しておられました。これは各学術誌の論文の英文抄録によるわけです。蛇足ながら付け足しておきます。

・おわりに

ある総会で議事がひどく延びてしまったことがあり、時間短縮のため、副理事長の私が一括し委員会等の報告をするようになりました。

各理事、幹事、委員が本業の傍ら、学会運営のため可成りの実務を執行し、結成時以来経験から学びつつ、一つ一つの改善を重ねてここまでできました。みなさまのご協力の賜と感謝します。

新しい方に新風を吹き込んで頂き、学会の更なる発展—助産学独自の理論体系の形成に進まれるよう願っています。



「産婆規則制定100周年記念式典・フォーラム」開催される

去る9月19日(日)、順天堂大学有山記念館において助産婦の職能・教育・学術の分野でわが国を代表する団体(日本助産協会、日本看護協会、全国助産婦教育協議会、日本助産学会、全国助産婦教育研究会)の共催による産婆規則制定100周年記念式典・フォーラムが開催された。(内容は表を参照されたい)

全国から開業助産婦や勤務助産婦など、活動分野を問わず、また、大先輩の助産婦から助産婦学生までキャリアや年齢を問わず、約300名の助産婦たちが一同に集い、南野知恵子参議院議員をはじめ来賓の方々の臨席の下、和やかな中にも熱気が感じられる式典が繰り広げられた。

式典は共催団体を代表して石塚和子日本助産協会会長の挨拶から始まった。石塚会長はまず、助産婦の関係団体が力を合わせて式典を挙げられた事は助産婦一同の大いなる喜びであると述べられた後、助産婦たちが時代の要請に応じながら社会的使命を果たして来た経緯に触れ、これからは周産期のみならず生涯にわたって性と生殖に関する健康問題への支援者としてその職責を拡大させて行くことが重要であると述べられた。

次いで来賓の方々から祝辞をいただき、その中で南野知恵子議員から「分娩室に止まらず家族ケアへと発展させ、助産婦の愛・技・知を地域で待っている人達へも提供できるよう助産婦の課題を共にクリアして行きましょう」と熱いエールが送られた。

その後、「助産婦100年の歴史と助産婦の将来展望」をテーマに、特別講演とフォーラムに移った。

特別講演は高橋みや子先生による「産婆規則制度誕生の経緯」と、金子光先生による「保助看法制定と助産婦」で、高橋みや子先生は長年の研究で蓄積された貴重な資料をスライドで豊富に示しながら産婆規則制度誕生

の経緯を生き生きと解説された。金子光先生は保助看法制定について、当時看護行政官として関与されていた立場から、終戦後GHQの影響を受けながら法制定に至った経緯をエピソードを交えながら分かりやすく解説された。

最後を飾るフォーラムは[助産婦の将来展望]をテーマに、開業助産婦(院長)、病院勤務助産婦(管理職)、消費者(母親・社会学者)、医師(元助産婦教育機関学長)の4人のパネラーからプレゼンテーションがあり、それらを下にフロアとのディスカッションが展開された。

開業助産婦の立場からは助産婦と医師の車の両輪に加えて、満足できる出産に向けて鍼灸師など他の職種を加えた四輪駆動の力が求められることと、助産院同士また病院との連携をさらに深めていく事の重要性を、勤務助産婦の立場からは“健やかな出産、心のかよった暖かい出産”に向けて施設内バースセンターの実現を、消費者の立場からは出産は産む女性たちが自分の身体が持っている能力に目覚める大きなチャンスであり、その援助者として最もふさわしいのが助産婦なので、産む女性を援助できる助産婦(正常な出産を援助できる助産婦)の増加を、そして医師の立場からは助産婦の本質的な専門性は分娩をピークとした周産期ケアにあり、この事は古来不変であるが、性教育など健康教育にも専門性を生かした独自の役割があり、生涯にわたる女性の健康のために広い視野を持った活躍をと、それぞれの立場からメッセージが送られた。

今回の式典を機会に、助産婦職の歴史を辿る中で、改めて助産婦職の存在意義と職務の重要性を問い直された参加者は多かったのではないかと思われた。

閉会のあいさつも聞き終えて退場される参

加者のそここに、和やかな満ち足りた会話と表情が見受けられた。

以上、助産学会の庶務担当として、記念式典の世話役をおおせ付かり、参加させていた

だいた立場から、その模様をかい摘んで紹介させていただきたい。

(庶務担当理事：小田切房子)

【産婆規則制定100周年記念式典・フォーラム】式次第およびプログラム

13:00 開会

記念式典

あいさつ 石塚 和子 日本助産婦会会長

来賓祝辞

南野知恵子 参議院議員

田村やよい 厚生省健康政策局看護課長

篠崎 清道 厚生省健康政策局母子保健課長

前原 大作 日本母性保護産婦人科医会副会長

13:30 特別講演Ⅰ【産婆規則】制度誕生の経緯 座長 渡部 尚子 (埼玉県立大学)
高橋みや子 (山形大学医学部看護学科)

14:30 特別講演Ⅱ【保助看法】制定と助産婦 座長 近藤 潤子 (天使女子短期大学)
金子 光 (元衆議院議員)

15:20 フォーラム【助産婦の将来展望】 座長 三井 政子 (岐阜医療技術短期大学)
平澤美恵子 (日本赤十字看護大学)

- 1) チームを生かした開業助産婦活動 山本 詩子 (山本助産院)
- 2) 施設内バースセンターをめざして 村上 睦子 (日本赤十字社医療センター)
- 3) 現在の母親が置かれている立場から助産婦への期待
大出 春江 (東京文化短期大学)
- 4) パートナーとしての助産婦への期待 松本 清一 (日本家族計画協会)

17:00 閉会

*特別講演Ⅰ「産婆規則」制度誕生の経緯は次号31号で高橋みや子先生にご執筆頂く予定です。



< ICMからお知らせ・・1999年7月 >

「助産とリプロダクティブ・ヘルス研究電子メールベースリストのお知らせ」

フィリピン、マニラで本年開催された第25回国際助産婦連盟大会では、助産とリプロダクティブ・ヘルス研究に関心のある助産婦らが集まり会合を持ちました。というのは、これらの領域における研究に関して開かれた場で議論の必要性が感じられたからです。

会合の成果の一つとしては、関心ある人々のリストを作ろうということになりました。このリスト作りは、情報（ワークショップ、セミナー、カンファレンスや新しい研究）を分かち合いたい人々や、連合し協働した仕事、問題解決や相互支援を促進しようとする人々の国際的ネットワークを組織するためのものです。

リストのつなぎかた

- ・あなたの名前と e-mail メッセージも送る場合： mailbase@mailbase.ac.uk
- ・シングルラインを含む場合： join_midwifery-research_firstname_lastname
(例としては [join_midwifery-research Jane Sandall](mailto:join_midwifery-research_Jane_Sandall))
- ・メールベースコンピューターによって、事務局が設定した特異コードを返信し、会員資格を確かめます。

さらなる情報がほしい方へ

- ・詳細はウェブไซด์を利用して下さい：<http://www.mailbase.ac.uk/lists/midwifery-research/>
- ・e-mail メッセージを送る場合は下記のメールアドレスへ：

midwifery-research-request@mailbase.ac.uk

連絡先：Dr.Jane Sandall, Reader in Midwifery, Dept of Midwifery, City University,
London E1 2EA

Tel: +44 171 505 5871 Fax: +44 171 505 5866

< 国際ニュースの紹介 >

Journal of the ICM, Vol.12 No4 July/August 1999 から

発展途上国における中絶

「世界中で年間5千万人が中絶をしており、そのうちの2千万人が危険な状況にあります。特にその90%近くが発展途上国で起きています。これらの94%の国では人工妊娠中絶は不法な行為とされ、こうした状況下で毎年およそ7万人の女性が死亡しています。」

これらの情報は、最近刊行されたWHOの「発展途上国における中絶」で報告されています。メキシコ、マウリチウス、キューバ、中国を含めた国々において行われた事例から広域な調査を包含しています。多くの女性たちにとって、避妊は中絶よりもより良い受胎調節であるように見られているが、こうした優秀な家族計画サービスを持つ国でさえ、人工妊娠中絶が広がっています。

あらゆる側面から女性たちにとって最良な選択ができるようにリプロダクティブ・ヘルスの質の向上、避妊方法の幅を広げて利用しやすくするなどの改善が必要とされています。

(WHO/28, 17, 1999)



Japan Academy of Midwifery

第14回日本助産学会学術集会

第14回日本助産学会学術集会開催のご案内(第2報)

少子・高齢化が進む中で、各々助産婦が時代に対応した実践ができるよう、助産婦活動の内容、質、場の変革が求められています。そのためには21世紀に向けて発想の転換をはかり、その専門性を見直す必要があるのではと思います。

そこで、今回、メインテーマを「今、改めて助産婦の専門性を問い直す」とし、助産婦活動の原点に立ち返って、皆様と共に助産学を追求していきたいと考えております。

下記の日程で学術集会の開催を予定しておりますので、多くの方々が鹿児島の地へご参集くださるようお待ちしております。

学術集会会長 若松かをい

1. 期 日 2000年3月19日(日)～20日(月・祝日)
2. 会 場 鹿児島市民文化ホール(鹿児島市与次郎2丁目3-1、099-257-8111)
3. プログラム概要

第1日目 3月19日(日) 12:30～18:30

★会長公演：「中高年女性への健康支援」鹿児島純心女子大学看護学部 若松かをい
座長；坂井明美(金沢大学医学部保健学科)

★特別公演：「世界の助産婦の動向」 ジュディス・P・ルークス
アタニティセンター アソシエーション顧問(米国)
座長；近藤潤子(日本助産学会理事長、天使女子短期大学)

★シンポジウム：「助産婦活動の原点としての子育て支援」

- ・産婦の立場から 日本助産婦会事務局長 岡本喜代子
- ・行政の立場から 厚生省児童家庭局母子保健課長 藤崎 清道
- ・臨床心理の立場から 日本こども家庭総合研究所・愛育相談所長 川井 尚
座長；加藤尚美(沖縄県立看護大学)
小牧敏子(鹿児島中央助産院)

第2日目 3月20日(月・祝日)

★ワークショップ 9:00～10:50

1) 助産婦の技と伝承

「助産婦の技」 聖路加看護大学 堀内 成子

「育児への援助 産科領域からの新生児への配慮」
鹿児島大学医学部附属病院 大迫 圭子

コーディネーター；菅沼ひろ子(宮崎県立看護大学)

2) 生殖医療と助産婦の役割

「出生前診断におけるケア実践への取り組み」
岩手県立大学看護学部 安藤ひろ子「不妊治療を受ける患者を支える医療者・助産婦として」
杏林大学医学部附属病院 福井トシ子

コーディネーター；岸田 佐智(高知女子大学看護学部)

3) 助産婦教育への提言

「助産婦の継続・卒後教育で培う実践能力」

日本赤十字看護大学

平澤美恵子

「基礎・基本を重視した実践能力の育成」

徳島大学医療技術短期大学部専攻科

竹内美恵子

コーディネーター：岸 英子（長崎大学医療技術短期大学部看護学科）

★教育公演 11:00～11:50

「我が国の助産婦活動と将来展望」

日本助産学会理事長・天使女子短期大学

近藤 潤子

座長：松本八重子（茨城県立医療大学保健医療学部・非常勤）

★一般演題発表 12:40～16:10

口演、示説（ポスター・ビデオセッション）

4. 学術集会参加・懇親会参加について

1) 参加費

・学術集会参加費	会員・前納（12月15日まで）	： 8,000円
	会員・後納（12月16日～2月18日まで）	： 9,000円
	非会員・前納（12月15日まで）	： 9,000円
	非会員・後納（12月16日～2月18日まで）	： 10,000円
	学生（但し大学院生は除く）	： 4,000円
・懇親会参加費		： 8,000円

【懇親会は3月19日（1日目）にサンロイヤルホテルにて開催いたします。】

2) 学術集会・懇親会の参加申込方法

参加を希望される方は、参加費を下記に振り込んで下さい。

郵便振替口座番号	01770-2-76188
加入者名	第14回日本助産学会学術集会

郵便振込用紙は一人一枚を使用して下さい。

なお、年会費の振込みは別です。お間違えのないようお願いいたします。

参加申し込みをされた方には、「集録」を事前にお送りする予定です。

2月19日以降に振込をされた方は、振込の確認ができないことがありますので、振込票受領証のコピーをご持参下さい。

なお、宿泊ホテル、航空券、昼食用お弁当については、日本旅行鹿児島支店が担当いたします。追って案内させていただきます。

★学術集会には、本学会に入会されていない方や、助産婦学生の方も参加できます。

多くの方々の参加をお待ち致しております。

5. 連絡先

第14回日本助産学会学術集会 事務局

〒895-0011 鹿児島県川内市天辰町2365番地

鹿児島純心女子大学 看護学部（若松研究室内）

Tel/Fax 0996-23-5441（学術集会専用）

第14回日本助産学会ワークショップの開催について

平成11年12月18日(土)金沢にて開催されます。
詳細は追ってお知らせいたします。

事務局だより

第14回日本助産婦学術集会準備の順調な進行ぶりが学会事務局から届いております。70題余の演題申し込みがあったとのことで盛会が予想されます。会員の皆様におかれましても会員以外の方々をも多数お誘いし、2000年春3月は鹿児島へ参集の計画を致しましょう。

